

北米調査報告

詩歌と戦争の時代を考える ——コーネル大学、トロント大学への出張報告にかえて

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

中野敏男

科学研究費受給研究プロジェクト（研究課題「紐帯としての日本語」）の研究活動の一環として、2013年3月27日より4月5日までアメリカおよびカナダへ出張し、コーネル大学とトロント大学を訪問した。両大学では、当地の日本研究者および大学院生、学部学生と日本研究の現状について懇談し、日本の言語・文化および歴史に関連する当地での教育の実情について事情聴取し、今後の研究方向についても意見交換した。またその際に、市民にも公開される形で開催された拙著『詩歌と戦争』（2012年刊、NHK出版）を主題とした書評討論会において特別講演を行い、日本の文化とりわけ詩歌が、当地の日系社会、日本語教育関係者、その他の関心をもつ多くの人々にどのように受容されているかについても事情聴取した。以下は、その特別講演の内容の一部を、当日の議論を踏まえて報告の一文にまとめたものである。

一 東日本大震災

——それは詩歌をあらためて問いに曝した

2011年3月11日、東日本大震災のその日から二年あまりがすぎて、現在の日本においてはこの「震災後」という時代が、文化という領域において、とりわけ詩歌という営みにとっても容易ならぬ試練の時であることがいよいよはっきりしてきている。

思えば、地震と津波と原発事故による災害があまりにも苛酷な仕打ちとして被災者を襲っているとき、そのニュースの衝撃に「言葉を失っていた」多くの人々に届けられたのは、「詩の言葉」だった。「遊ぼう」っていうと、「遊ぼう」っていう」、金子みすずのこの一節がテレビから繰り返し流されてまず知れ渡ったが、この詩は、それ自体としては震災などとの関わりから生まれた作品ではないはずだろう。それなのにこの言葉は、そのとき確かに震災に傷ついた人々の心に響く力を持っていたと見える。そればかりではない。この時には他にも多くの詩や歌が巷に流れたし、また専門のミュージシャンだけでなく、数多の人々が詩や歌をたずさえて被災地の避難所を訪れ、その詩の言葉が傷つき苦しんでいる被災者たちの心を癒して、「絆」への信頼を思い起こさせたし、勇気や希望さえももたらしめている。それは、音楽や詩歌の確かな力をあらためて実感した経験だった。

ところが、そんな経験から二年あまりがすぎて、現在では、そこで喚起された人々の感情がある岐路に差しかかっていると見える。被災の当初は心優しく「がんばろう」と励ましあったはずのあの声が、一方では、今もなお震災から復興へと懸命に歩んでいる被災地

の人々の持続する努力を支えていると思われるのに、他方では「がんばろう日本」というかけ声がともすると「わたしたちの日本」にひたすら自己同一化する意識を生み、それが排外的な悪しきナショナリズムの感情にも結びついて広がっているからである。今日では、在日朝鮮人や日本に住む韓国人に「死ね」などという悪意と攻撃の言葉を声高に浴びせかけ、それが「ヘイトスピーチ」としてデモの隊列をなしたり、ネット上にも広がる気配を見せたりしている。これは、これまでになかったような感情の社会的噴出であり、なにやら息苦しく、暗い時代の予兆を思わせるような事態だと言わねばならない。

もちろん、そのような社会意識の動向には、「現代社会」に潜むそれなりの歴史的・社会的な背景や根源があって、それを直ちに詩歌の責任としてだけ論ずることは出来ない。まずは政治や経済にその「原因」を冷静に見極めておくことは大切に違いない。とはいえ、「震災後」という特別な状況の下で実際に実感したのが「詩の力」であり、その力がなお現実には動いていると認められるなら、音楽や詩歌の果たすこの時代への役割について、いまわれわれはあらためて考えなければなるまい。音楽や詩歌が時代に共振する時がまたやってきている、そんなときだからこそ、時代を動かす力としての詩歌曲の意味をしっかりと考えておきたいと思うのである。

二 戦争の時代には詩が動員されていた

—詩歌の抒情が孕む〈危険〉を考える

そう思って歴史を顧みると、そのような「詩の力」が実際にかり出され、大いに利用されたときがあった。それが戦争の時代である。

「15年戦争」とも言われたアジア・太平洋戦争の時代は、あらゆる文化的な営みが窒息させられた「不毛の時」とわれわれがちだが、実はむしろ詩や歌が人々の間で大に行き交った時代でもあった。とりわけ日中戦争が本格化する30年代の後半になると、戦争に翼賛する詩歌集の出版が急速に拡大したばかりでなく、36年にはラジオ放送番組『国民歌謡』がスタートし、41年には大政翼賛会文化部が詩歌集の編纂とその朗読会の広範な開催に乗り出して、詩歌による戦争翼賛の形が国家的な規模で組織されるようになる。これに対して詩人たちもまた次第に積極的に応ずるようになって、41年12月に日米戦争の戦端が開かれると、時の詩界はまさにこぞって「詩歌翼賛」に乗り出すことになる。43年に軍艦建造のための募金を目的に作られた『辻詩集』には、三木露風、白鳥省吾、千家元麿など、時の名だたる詩人たちが総勢207名参加してそれぞれ新作を寄せている。これは目立った一例だが、ともあれ歴史的に見れば、「戦争協力」という問題において詩は決して無垢なのではなかった。

もちろん、このような詩の戦争協力という問題は、これまで決して問われなかったというわけではない。「戦後」という時代を通してみれば、それはむしろ繰り返した大きな思想的問題になってきた。とはいえこれまでこの問題は、主として戦時における「転向」の問題、言い換えると詩人の志操の事柄として問われてきたと言いうるだろう。すなわち、詩作に

において美や愛を表現しようとしていた詩人が、戦時の権力による強制に屈して志を曲げ、「戦争協力」という不本意な行為に手を染めてしまったという問題として論じられてきたのである。戦後初期に「文学者の戦争責任」が問われたときもそうだったし、それにやや遅れてそのように責任を問うた当の「前世代の詩人たち」の責任をさらに問題化した吉本隆明らの問いも、またそれであった。そこで問われたのは、戦争に反対するか翼賛するかを自ら選択する詩人一人ひとりの倫理なのであった。

しかし、そのように考えるべき問題の焦点を「転向」という事柄あるいは詩人の「倫理」に絞ってしまうと、それで詩作という営みに固有の問題がかえって見えなくなるということはないだろうか。個人の志操についてなら、それは詩人ならずとも同じように問題化されうるし、問題化されねばならないはずだ。そこには詩作に特別なことはない。すると、戦時の詩作において特別に問われねばならない問題とは何だったのか。

そのように考えてきて、われわれはあらためて、3.11以降の「震災後」という特別な状況での詩歌の経験が重要な問題の扉を一つ開く鍵でもあるということに気づかされる。この「震災後」においてわれわれが経験してきたのは、詩歌が災害に傷ついた人々の心を癒す力をもったということであり、またそれに共感する人々も広範に存在して、詩歌が時代と共振したという事態である。そして、それにより喚起された感情が、時間の経過と共にある岐路に立たされることになっているということである。問題は、詩人の志操というよりは、むしろそれを越えて働く「詩の力」なのだ。すなわち、ここで考えなければならないのは、そのようにして時代にシンクロして思いもよらぬ「力」を発揮するようになっていく詩歌の抒情の働きについてであろう。これは、詩歌に関わりを持つものにとって、個人的な志操の堅持などより実ははるかにやっかいな、詩歌という営みの根源にある問題だと言わねばならない。善意の喪失ゆえにではなく、むしろ善意に敷き詰められていると見える道こそが、詩歌の抒情の力に導かれて、戦争へ続いていくということがありうるのではないか。

三 もうひとつの震災後と詩情の抗争

—植民地主義を徹底して清算するために

そこで、歴史に学ぶということが問われてくる。日本の近代史は、日本全体の進路を大きく左右することになった大震災の経験をもうひとつ持っており、その時の震災後は、まっすぐに戦争前の時代へと繋がってしまった。すなわち、関東大震災からアジア・太平洋戦争に至る時代がそれであり、この時代について書いた拙著『詩歌と戦争』という作品は、この時代がまた詩歌の時代でもあったことに注目している。そのように見直してみると、本書『詩歌と戦争』はかつての「震災後」を扱いながら、確かにいまの「震災後」に繋がっている。

ここではそんな『詩歌と戦争』といまの「震災後」の繋がりについて、本書刊行の後にさらに様相が進行した感情の状況に注意して、二つの点を特にお話したい。

一つは、いまの「震災後」に目立ってきたヘイトスピーチにおいて、その標的として主にやり玉に挙げられるのが在日朝鮮人や日本に在住する韓国人であるという点に関連している。『詩歌と戦争』では、関東大震災前後の童謡創作の隆盛という時代状況と、震災の時に発生した朝鮮人の虐殺事件との関連に触れた。すなわち、その背景で進行していた日本のアジアに向かう植民地拡張の動きと、その流れに乗りながら植民者として朝鮮や台湾へと向かった日本民衆の野心と不安が、優しい詩歌曲を求める心情に照応していたという消息についてである。それを踏まえて顧みれば、いまの「震災後」にそのようなヘイトスピーチが目立ってくるというのも、どこかでそのような政治・経済的な時代状況と関連があると見なければなるまい。ここでは現在に継続する植民地主義について詳しい分析は控えるが、そんな時代への冷静な認識が必要だという点には注意を向けておきたい。

さてもう一つは、それとも関連するが、いまの「震災後」に癒しを求めて喚起された感情が、悪しきナショナリズムの排外的な意識を内包しながら拡大しているという現象は、関東大震災後の童謡創作の隆盛時に見られた「内向する優しさ」が、戦争の時代に続く「他者の消去」という意識の限界を内包していた事情と相似しているということである。そうだとすれば、かつての「震災後」にそんな「内向する優しさ」を食い破っていくような詩情の形成が求められていたように、いまの「震災後」にもそんな詩情を巡る抗争が問われているということになるだろう。この抗争についてしっかりした認識があるならば、道は細くとも閉ざされているわけではない。その道行きには困難もあろうが、そうであればこそ歴史に学ぶことは何より大切である。

そう考えてみると、わたしの研究活動やそのささやかな成果である『詩歌と戦争』に限らず、日本の歴史と文化を問い直し研究する作業は世界のどこにあっても、いまの「震災後」に生まれている日本のこの状況と無関係にはありえないことも明らかだろう。そんなことを考えながら、連繫した研究を発展させていきたい。